

群 教 セ	I01 - 01
	平18.238集

通常の学級に在籍する特別な支援を 必要とする生徒に対する支援方法の工夫 — 「ほっとルーム」を活用した支援体制の整備 —

特別研修員 塩野谷 喜生 (嬭恋村立東中学校)

《研究の概要》

本研究は、従来の「ほっとルーム」の経営に、特別支援教育の視点を取り入れ、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒に対して、個々の教育的ニーズを把握し、チームとして個に応じた支援を行う場として、また、支援方法を学級や学校全体に発信する場として「ほっとルーム」を機能させようとする取り組みである。

I 主題設定の理由

集団不適應の生徒や不登校生徒を支援する目的で、本校に「ほっとルーム」が設置されたのは2年前である。気持ちの落ち着く空間作りに心がけるなど、室内の環境整備を進めるとともに、昨年度からはスクールカウンセラーも配置され、生徒や保護者との相談に当たることで、不登校傾向の生徒が教室復帰を果たすなどの成果を上げてきた。今年度は「ほっとルーム」も3年目となるので、生徒の実態に合わせて運営方法の見直しを行い、より一層の活用を図りたいと考えた。

今年度の生徒の学校生活の様子をみると、頻繁に体調不良を訴える生徒や、ふだんから落ち着きのない生徒、他人とうまくコミュニケーションがとれず悩んでいる生徒、授業に集中できない生徒など、気になる生徒が多数いる。このような生徒の中には、担任や養護教諭に相談したり、ほっとルームで心を落ち着けたりする生徒がいる一方、だれにも相談することなく一人で悩んでいる生徒もいる。このような生徒たちに対して、多面的な理解を行い、教育的ニーズに応じた支援を、組織的に行っていくことの必要性を強く感じる。

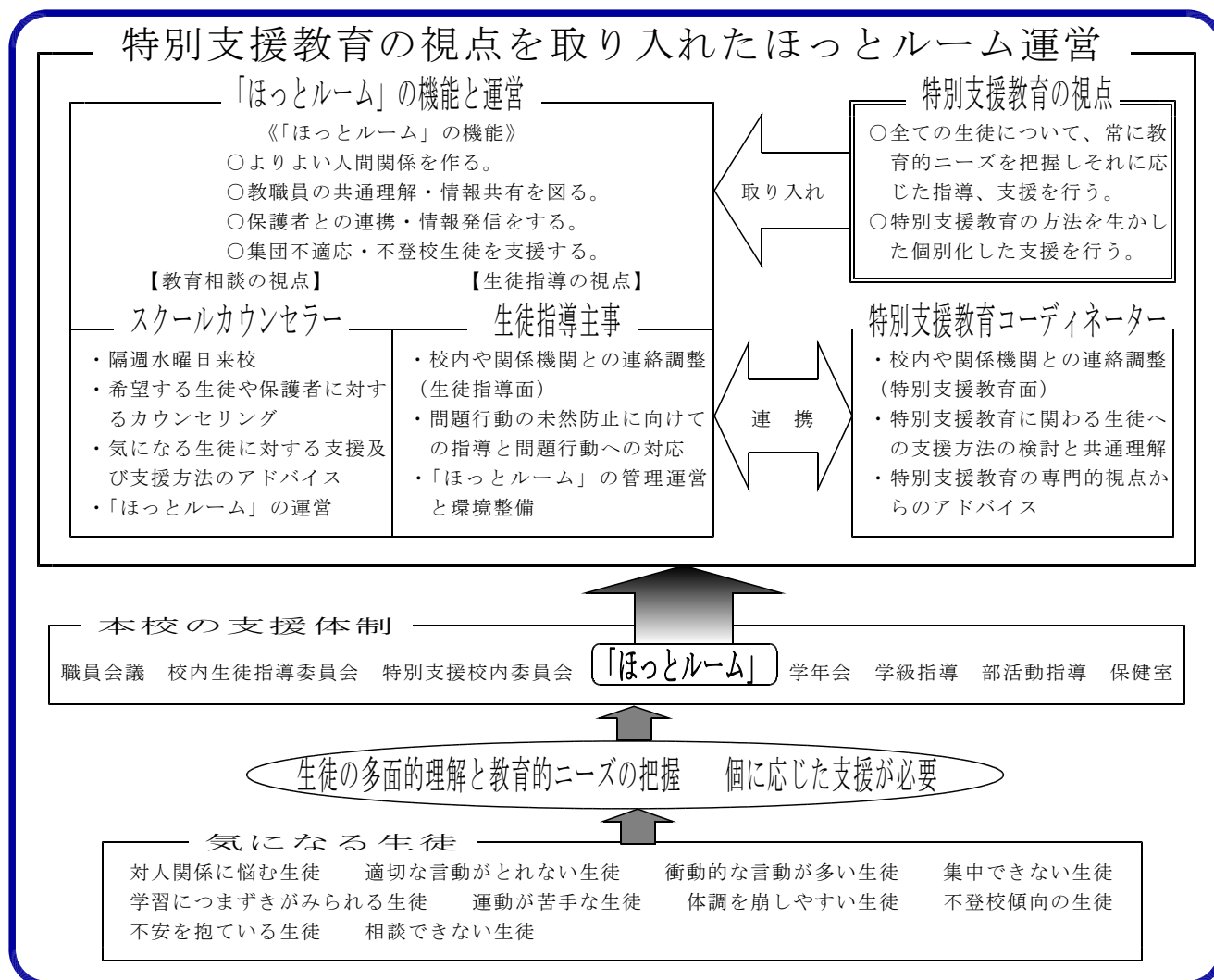
今年度の「ほっとルーム」の利用状況をみると、来室する生徒はほぼ決まっており、来室時間は昼休みが最も多く、本を読んだり、テーブルで折り紙を折ったりしている。「ほっとルームノート」に自分の思いを書いている生徒も多い。「ほっとルームノート」はだれでも閲覧可能なので、ノートを見て、書き込みに対して思ったことを書いていく生徒もあり、意見交流の場ともなっている。

生徒の書き込みに対しては、スクールカウンセラーがアドバイスを書き込むことになっている。

「ほっとルームノート」への記入内容を見たり、来室する生徒の話を聞いたりしていると、「ほっとルームは落ち着く。」「いろいろ書いたり言ったりするとすっきりする。」「友達とけんかして困っている。」「学校も勉強もつまらない。」など、比較的率直な気持ちを伝えてくれる。隔週の水曜日にはスクールカウンセラーが来校して専門的な相談を行っているが、いろいろな生徒と接する中で、特別な配慮や支援が必要な生徒もいるので対応策が必要ではないかという指摘も受けている。

このようなことから、今年度は、「ほっとルーム」の運営に、特別支援教育の視点を取り入れ、チームとしてこれらの生徒への支援を行いたいと考えた。通常の学級に在籍している特別な支援を必要とする生徒が、他人とうまくかかわれないためにいじめの対象になったり、不登校になったり、さらに二次的な障害を引き起こすケースもある。実際に、特別な支援を必要とする生徒が来室して心を落ち着けているような場面も見られる。このような生徒に対して、生徒指導主事、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラーが連携しながら、一人一人の教育的ニーズを把握し、人間関係改善プログラムを提案したり、学力の定着を図ったりするなど、チームとして個に応じた支援を行う場として、また、支援方法を学級や学校全体に発信する場として「ほっとルーム」を機能させたいと考え、本主題を設定した。

図1 構想図



II 研究のねらい

生徒指導主事とスクールカウンセラーが、特別支援教育コーディネーターと連携し、これまでの「ほっとルーム」の機能に、特別支援教育の視点を取り入れることで、特別な教育的支援が必要な生徒を、より多面的に理解し、個に応じた有効な支援を行う。

ングや学習支援等、一人一人の教育的ニーズに応じた支援を行うことで、生徒の力を高められるであろう。

3 生徒指導主事、スクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーターが連携しながら支援を進めることで、特別な支援を必要とする生徒に対して効果的な支援が可能になるであろう。

III 研究の見通し

1 「ほっとルーム」の運営に当たり、従来の生徒指導・教育相談の視点に、特別支援教育の視点も取り入れることで、より多面的な生徒理解ができ、個に応じた有効な支援の方法や新たな手だてが見付かるであろう。

2 特別な支援が必要と思われる生徒については支援チームを作ってソーシャルスキルトレーニングや学習支援等、一人一人の教育的ニーズに応じた支援を行うことで、生徒の力を高められるであろう。

IV 研究の内容と実践

1 特別支援教育の視点を取り入れた「ほっとルーム」の運営

(1) 「ほっとルーム」の設置

昨年度、生徒の意見やスクールカウンセラーの助言を受けて、観葉植物、金魚、CDプレーヤー、空気清浄機、本、ノートなどを設置したことに続き、今年度は、パズルや本、学習教材などを設置する。

(2) 活動の流れ

表1 活動の流れ

	通常の「ほっとルーム」に関する活動	本研究としての活動
4	○「ほっとルーム」の設置（環境整備、使い方の確認、職員・生徒共通理解、スクールカウンセラーとの話し合い）	○「ほっとルーム」の運営方法の見直し（特別支援教育の視点を取り入れた運営） ○特別支援教育コーディネーターとの連携
5	○利用生徒の状況把握と情報交換 ○生徒指導委員会の定例化（個々の生徒に対する支援方法の検討と全体への周知）	○利用生徒に対する特別支援教育の視点に立った状況把握 ○個々の生徒に対する特別支援教育の視点に立った支援方法の検討
6・7	○特別支援教育校内委員会、生徒指導委員会での協議（気になる生徒に対する支援方法検討、職員間の情報交換・共通理解） ○相談活動の充実 ○利用生徒の状況把握と情報交換・環境整備	○学校生活アンケートによる実態把握（現段階における課題の確認と共通理解） ○個々の生徒に対する特別支援教育の視点に立った支援方法の提案（チーム支援） ○個々の生徒の教育的ニーズに応じた支援（ソーシャルスキルトレーニング、補習学習等） ○「ほっとルーム」の環境整備（ソーシャルスキルトレーニングブック、教材等）
8	○「ほっとルーム」の運営に関するスクールカウンセラーとの協議（情報交換、環境整備、支援方法の確認・修正）	○「ほっとルーム」からの支援について特別支援教育コーディネーターとの協議（特別支援教育の情報収集、支援方法の確認）
9・10・11	○利用生徒の状況把握と情報交換 ○特別支援教育校内委員会、生徒指導委員会での協議（気になる生徒に対する支援方法検討、職員間の情報交換・共通理解） ○相談活動の充実	○個々の生徒の教育的ニーズに応じた支援の継続 ○特別支援教育に関する啓発活動 ○学級集団に関するアンケートによる実態把握（学級集団に対する支援方法の検討） ○学級集団支援の提案 《実践・評価・検討・修正》 ○実践のまとめ
12	○「ほっとルーム」の運営に関するスクールカウンセラーとの協議	○個々の生徒の教育的ニーズに応じた支援の継続 ○特別支援教育に関する理解啓発活動
1・2・3	○利用生徒の状況把握と情報交換 ○特別支援教育校内委員会、生徒指導委員会での協議	

(3) 「ほっとルーム」の運営

「ほっとルーム」は生徒指導主事が中心となり、スクールカウンセラーと協力しながら運営に当たっているが、ここに特別支援教育コーディネーターを加え、特別支援教育の立場からのアドバイスを取り入れながら、個々の生徒に対する理解を図り、支援方法や支援チームを考え、職員会議や生徒指導委員会を通して全体に提案していく。

(4) 特別支援教育の視点

特別支援教育は「これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、その対象でなかったLD、ADHD、高機能自閉症も含めて障害のある児童生徒に対してその一人一人の教育的ニーズを把握し、当該児童生徒のもてる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するために、適切な教育や指導を通じて必要な支援を行うもの」と定義される。この定義をもとに、本研究では、特別支援教育の視点を「すべての生徒について、常に教育的ニーズを把握し、それに応じた指導、支援を行うこと」「特別支援教育の方法を生かした、個別化した支援を行うこと」ととらえた。

2 「ほっとルーム」来室者への実践

(1) 女子A、B

1学期の前半、ほぼ毎日、休み時間ごとに来室していた2年生女子3人のうち1人は途中から来室しなくなり、1学期後半からA、B2人で来室するようになった。2人は同じクラスであり、授業が終わると来室して金魚の世話をしたり「ほっとルームノート」に書き込みをしたり、折り紙をしたりして休み時間を過ごし、授業に戻ることを繰り返していた。2人はスクールカウンセラー（以下SC）をととても信頼していて、来校することになっている隔週水曜日を心待ちにしており、毎回相談を受けていた。

(2) 具体的支援

SCと生徒指導主事とで、相談の様子や内容、日ごろの観察の様子を出し合い、特別支援教育コーディネーターと相談して指導方針を考え、全体で確認して支援を進めることにした。

表2 「Aへの対応」

支援担当	担任、特別支援教育コーディネーター、生徒指導主事、委員会担当
状況	表情が硬く、言葉数が少ない。発言した場合も消極

	的な内容の言葉が多い。部活動にも所属しておらず、クラスの中で友達に誘われても交わろうとせずに1人であることが多い。唯一Bとは一緒にいる。
方針	成就感を味わえるようにする。自信をもてるようにする。
方策	望ましい行動が見られたときはその場でほめる。周囲に認められるような場面設定を工夫する。
支援経過	担任、清掃担当、委員会担当など、活動場면을直接見る教師が、がんばっている様子を認めたときに励ましの言葉かけを行った。学年行事である職場体験学習やその発表活動に取り組む中で、教師や友達、事業主など多く人から賞賛や励ましを受けた。
変容	表情が柔和になり、少しずつではあるが自分の考えを主張できるようになってきた。B以外ともかかわるようになった。ほっとルームへの来室回数が減り、行動に積極性が見られるようになった。
継続支援	引き続き、がんばりを認めて励ます。自己決定場面や意思表示場面の意図的設定。

表3 「Bへの対応」

支援担当	担任、SC、生徒指導主事、特別支援教育コーディネーター
状況	友達とのトラブルを訴えることが多い。与えられた仕事はしっかり行うことができる。ふだんは話好きで、「テレビや本に夢中になっていると横から話しかけられても全然気付かないのでよく親に怒られる」、「人の話を聞いていないとよく言われる」、「誰彼かまわずすぐ話しかけてしまう癖がある」など、いろいろなことを話してくれる。緊張すると身体がこわばり、あまり話せなくなる。
方針	他人の気持ちを理解できるようにする。自分の行動を振り返れるようにする。
方策	ロールプレイを通して他人の気持ちを体験できるようにする。ソーシャルスキルトレーニングを通して、その場に合った言動を考えられるようにする。
支援経過	「会話への割り込み」「上手な断り方」などのロールプレイを行い、様々な立場での言動を体験させ、自分の行動を振り返らせた。不安やイライラを取り除くリラクゼーション・トレーニングを行った。
変容	話に加わろうとしたとき、気付いて口には手当てる内省行動が見られた。リラックスすると表情も柔らかくなり、落ち着いた行動につながった。Aと離れて一人でいたり下級生と一緒にいたりすることが多くなった。登校を渋る様子が見られるようになった。
継続支援	SCを中心に相談活動を続け、自己理解と他者理解のトレーニングを続ける。家庭、学級集団に向けての働きかけを工夫する。

3 全校生徒の実態把握

(1) 「学校生活アンケート」の実施

「ほっとルーム」に来室する生徒以外にも特別な支援を必要としている生徒は多数いることが考えられるので、実態把握を行うことにした。アンケート項目をほっとルーム担当で考え、全校生徒を対象として6月に実施した。

(2) アンケート結果と考察

まず、1日の学校生活を振り返って、どんな気持ちになることが多いか尋ねた。結果は「充実している」「やや充実している」と回答した生徒

が全体の約半数で、「あまり充実していない」「充実していない」「どちらとも言えない」を加えると残りの約半数となる。後者の生徒にも充実感が得られるような支援を工夫していく必要がある。

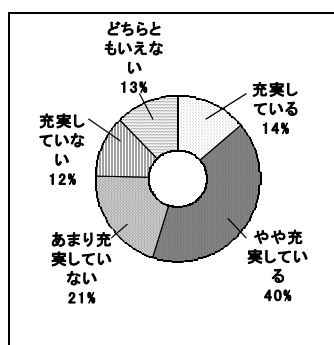


図2 「学校生活を振り返って」

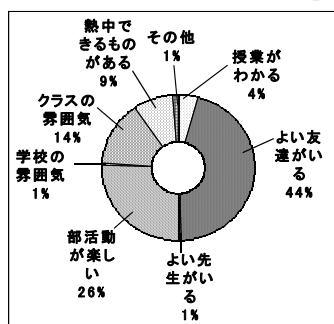


図3 「充実している理由」

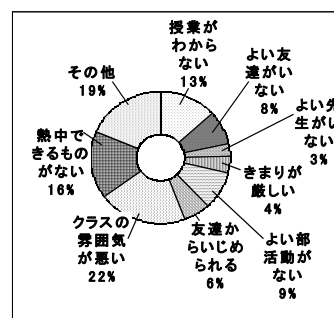


図4 「充実していない理由」

のは、友達関係や自分が所属するクラスの雰囲気の良いさと、熱中できるものの存在であり、それは充実していないと感じている生徒が理由として挙げた結果とほぼ一致する。

充実していない理由は、ばらつきはあるものの、クラスの雰囲気や友達関係、熱中できるものの有無が多く部分を占めている。また、授業内容が

わからないなど、学習面のつまずきが原因で充実感をもてない生徒も多数いる。

次に、不安や悩みを解決するのに、だれに相談するかを尋ねた。中学生として不安や悩みがあることは当然であり、その内容は学習面、進学や将来のこと、友達のこと、部活動、自分自身のことなど多岐にわたる。では、その悩みを相談する相手はだれかという、以下のとおりである。「友達」が全体の約三

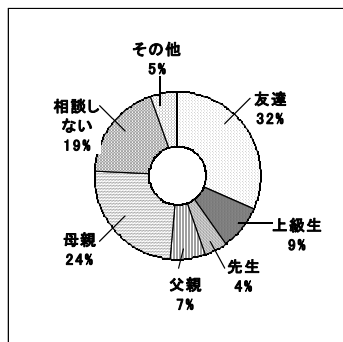


図5 「だれに相談するか」

分の一、「母親」が約四分の一、次いで多いのは「相談しない」であり、全体の約五分の一にのぼる。自分自身で悩みを解決し成長していける生徒がいる反面、悩みが解決できないまま

不安を募らせ、生活に影響が出ている生徒もいると考えられる。

4 「ほっとルーム」からの支援

(1) 「ほっとルーム」の活用

アンケート結果から、「ほっとルーム」としてはどのようなことができるかを考えた。

まず、不安や悩みをもっている生徒の19%が「相談しない」と回答している点に注目し、このような生徒のうち何人かでも、解決の糸口を見付けられればと思い、気軽に相談できる場所としての「ほっとルーム」を、アピールしていくことにした。

「ほっと通信」での呼びかけはもちろん、部屋のドアをふだんから開けておくようにしたり、SCが給食時に生徒と一緒に食事をしたりするなど、生徒と接する機会を多く作るように努めている。

(2) 学習面の支援

学校生活が充実していない理由の一つに挙げられている学習面のつまずきに対する支援については、各学年独自に取り組んでおり、放課後補習を行うなどして成果を上げている。「ほっとルーム」にも簡単な教材を備え、来室した生徒で学習面の不安が大きい生徒に対しては、学習指導も行えるように環境整備を進めている。欠席がちだった生徒から学習の遅れを取り戻すために「ほっとルーム」で学習したいという希望も出されているので、引き続き環境整備に努めていく。

(3) 集団に向けての支援

学校生活が充実していない理由の一つに挙げられている「クラスの雰囲気が悪い」という部分であるが、クラスは生徒の居場所であり、学校生活の大半を占めることから、その雰囲気はとても重要である。アンケート結果をクラス別に集計してみると、それぞれのクラスで数値が大きく異なり、クラスの特徴が表れる。クラスの特徴と、「ほっとルーム」利用生徒や気になる生徒の在籍状況を重ね合わせると、関連性も見えてくる。

そこで、来室生徒への支援を続けながら、その生徒が在籍する学年やクラスに向けての支援について考えることにした。クラスの雰囲気作りのための活動や、対人関係能力を高める活動、ソーシャルスキルトレーニングなど、クラスの居心地がよくなるような活動を行えば、生徒個人にも集団にも有効である。クラスの特徴に合った効果的な活動を「ほっとルーム」から提案しようと考えた。

対象とする学年を第2学年とし、学年会で話し合ったり、「学級の雰囲気を把握する質問紙」(『不登校問題課題解決支援資料』参考)を使用してクラスに関するアンケートを行ったりして、さらに細かい実態把握を行った。

ア 「クラスに関するアンケート」結果から

学年会でも、このクラスは学習への取組にやや問題がある生徒がおり、友達同士のトラブルもよく起こるが、担任と生徒とのコミュニケーションはうまくいっているという見方をしていたが、アンケートでも概ねそのような結果が出た。また、「友達が間違うと笑ってしまう雰囲気がある」「友達同士についてのトラブルがよく起こる」「グループ同士の仲がよくない」などの項目で「YES」の回答が多く、「何でも話せる雰囲気がある」「お互いのことをよく知っている」「みんな平等である」という項目で「NO」が比較的多かった。

イ 活動の提案

クラスの実態から、どのような活動を取り入れたらよいかを「ほっとルーム」担当で協議した結果、相手を信頼し気持ちを一つにして動作するゲーム「トラストアクション」、人によって価値観が異なることを知り、それぞれの考えの妥当性を認め合う「大切なものランキング」、他者への関心を高め、他者を受け入れる体験をする「ミラーゲーム」などが有効と考え、学年に提案した。

ウ 活動の実際

表4 活動の実際

担当者	「ほっとルーム」担当
活動名	「大切なものランキング」
ねらい	人によって価値観が異なることを知り、それぞれの考えの妥当性を知る。
時期	11月下旬
時間	学級活動 20分程度
形態	4～5人グループ
活動の流れ	①プリントに書かれた10個のものを見て、自分にとって大切な順に番号をつける。②グループの中で順番に自分の考えを紹介する。自分とどこが違うのかよく聞く。③グループの人の考えを聞いて自分の考えと比べ、感想をまとめる。
活動の様子	全員が真剣に順番を決めていた。話合いの場面では言いづらそうにしている生徒も見られたが、概ね和やかに話合いが行われ、歓声が上がるような場面も見られた。
生徒の感想より	「全員順番が違っていたのには驚いた。」「親と友達と食べ物やはり大切だ。」「十人十色、人によって感じ方が違う。」「みんないろいろ考えていると思った。」「ほかの人の考えがわかっておもしろかった。」
活動を振り返って	生徒は予想した以上に楽しそうに活動に取り組んでおり、友達との違いに驚いていた。計画的にいくつかの活動を行うとさらに効果的であろう。

(4)「特別支援教育」理解啓発への取組

「すべての生徒について、常に教育的ニーズを把握しそれに応じた指導、支援を行う」という「特別支援教育」の理念が学校全体に浸透することにより、特別な支援を必要とする生徒への適切な対応はもちろん、他の生徒についても確かな学力の向上や豊かな心の育成が期待できると考え、特別支援教育コーディネーターと連携して校内研修等で職員に対する理解啓発活動を行った。特別支援教育の考え方や障害のある生徒への接し方など、本校の実情にあった内容の印刷物を配布し、全職員で理解を深めるための研修に取り組んだ。

軽度発達障害など、通常の学級での特別な支援を必要とする生徒は、周囲から見るとふざけているように見えたり、「しつけ」の問題といった誤解を受けたりすることがある。このような誤解をなくすために必要なことは、障害に対する正しい知識である。資料として、「特殊教育から特別支援教育へ」「つまずきや困難さへの気づきと理解」などを準備し、説明を行った。また、授業の在り方や生徒への接し方を見直すことで救われる生徒

も多いと考え、授業中、気になる生徒（授業の定着度の低い生徒、集中できない生徒）への支援を考える際、話すスピードや板書の量、板書の字の大きさや、授業全体の時間配分など、授業の進め方の中に生徒のつまずきの可能性がないか見直しを行うこと、また自己肯定感ややる気を高めるかわかり方を心がけることなどを確認した。

V 研究のまとめと今後の課題

「ほっとルーム」を利用する生徒は、それぞれにいろいろな思いや悩みをもっている。そんな生徒たちに対して、これまで生徒指導や教育相談の立場で接してきたが、今回、特別支援教育の視点を取り入れて再度観察してみたとき、新たな支援の可能性が見えてきた。

特別支援教育コーディネーターやスクールカウンセラーと連携し、来室した生徒に対して、友達とのかかわりで悩んでいる生徒にはソーシャルスキルトレーニングを、学習面で苦しんでいる生徒には学習支援を、自分に自信がもてない生徒にはがんばりを認めて励ますなど、それぞれの生徒の教育的ニーズに応じた支援を行った結果、生徒の行動に変化が見られるようになった。今後も継続的に生徒の変容を観察し、支援についての評価と修正を重ね、適切な支援を行っていきたい。

また、個々の生徒に対する支援と並行して行った学級集団への支援は、生徒にとって新たな発見があり効果的であったが、同時に実態把握と活動選定の難しさと継続的な実施の重要性を感じた。

特別支援教育の情報発信については、次年度の本格実施に向けて生かしていける活動となった。さらに研修を行い、理解啓発を深めていきたい。

今回、特別な支援を必要とする生徒に対して「ほっとルーム」からの支援を考えたわけだが、本校の支援体制としては「特別支援教育校内委員会」や「生徒指導部会」もあり、それぞれの組織でそれぞれ支援方法を検討している。内容的に重複する部分も多いので、今後はこれらの組織が効果的かつ効率的に機能するよう、組織の見直しも視野に入れた取組を行っていきたい。

(担当指導主事 中村 健)

Web検索キーワード

【特別支援教育 ほっとルーム 支援体制
特別支援教育コーディネーター 】